吉田松陰と松下村塾

―青森公立大大学院が掲げる灯火に寄せて―

津田　眞澂※

序　章　北辺の青森と吉田松陰

第一節　津軽と吉田松陰

1600（慶長5）年、豊臣秀吉軍が徳川家康軍に敗れて、徳川家が最も恐れていた中国地方4国を奪われて防・長2国に押し込められたとはいえ、19世紀に吉田松陰が生きた毛利家の長州藩は、徳川時代には外様大名の47万石に及ぶ雄藩であった。この松陰の時代に本州の北辺の津軽藩は実質4万5千石の外様小藩で、しかも宝暦・天明年間は、飢饉に苦しめられて藩が大阪の鴻池組の米商人の財政管理を受け続けるという歴史をへていた。長州藩とは比較にすることもおかしいという読者の印象はもっともであろう。

ところが吉田松陰は長州藩の藩校明倫館教授で江戸に出ていた時、折からのアメリカ・ペルー艦隊来冦で下田に来た前年に弘前を訪れて滞在したことがあるということから、本稿の題についての因縁を思った次第である[1)]。

南部一族の形成

奥州が日本史で忘れられないのは、紀元11～2世紀にかけての平泉の藤原清衡、基衡、秀衡のいわゆる藤原3代の時代で、源義経、弁慶、静御前の名とともに知られていよう。藤原三代はその産銅を基礎として津軽十三湖（湊）を拠点として中国・朝鮮と貿易した当時の日本最大の地方であり、その富で鎌倉幕府に対抗した。

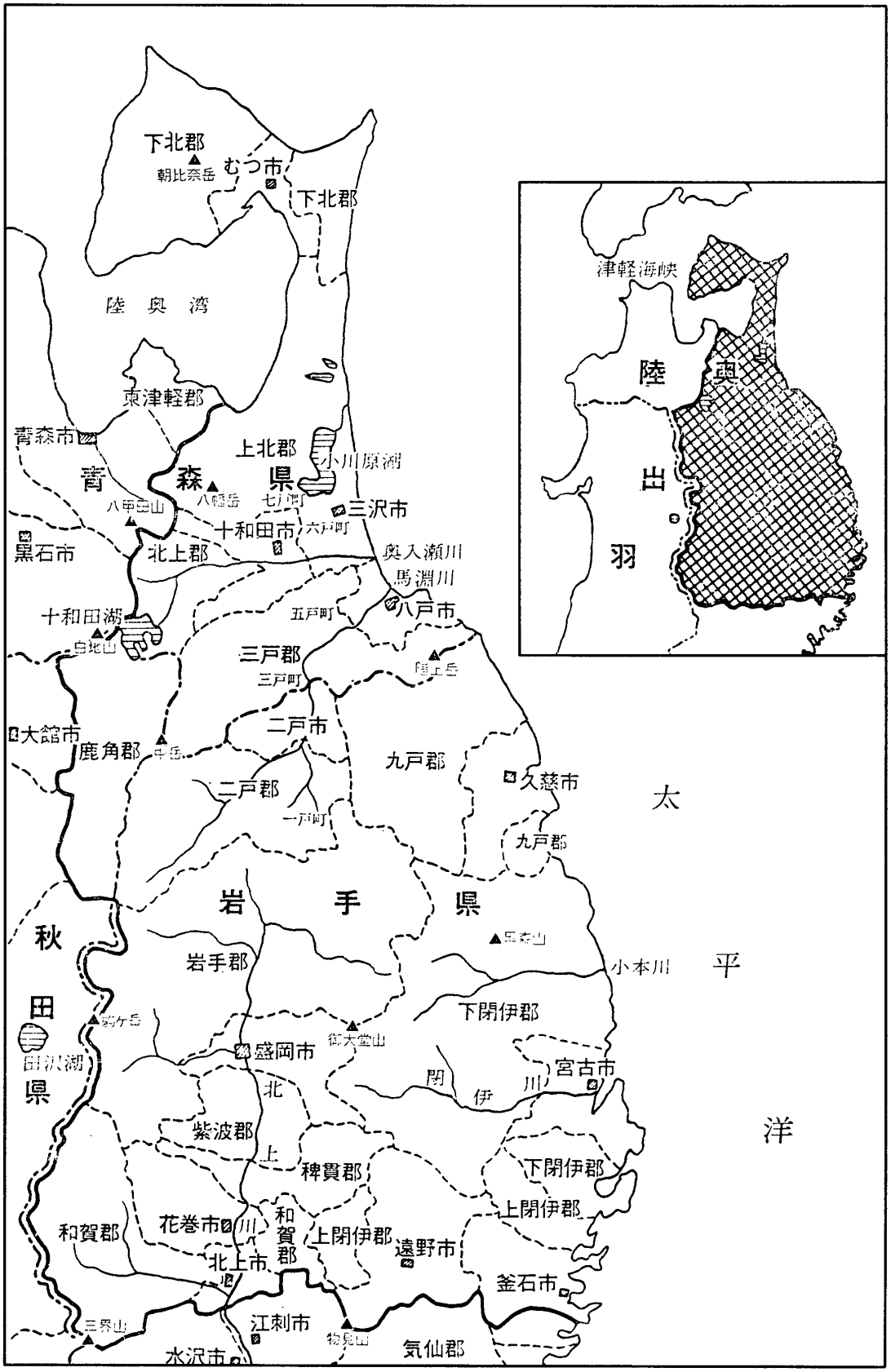
1189（文治5）年の義経誅殺後、鎌倉幕府将軍源頼朝の従軍人の一人、南部三郎光行はその戦功で土地を貰い、ここに南部一族を形成し、一戸～九戸に及ぶ地方豪族となっていった。

津軽（弘前）藩の成立　この南部氏が領地を拡大していって、図1で見るように、北進して下北半島にまで及んだ。また西進についても、図2で見るように1148年頃から津軽地方を侵略し始めた。この間に一族の大浦為信は姓を津軽と改めた。1571年2月、織田信長が浅田長政を近江で攻めた年、大浦為信は反乱を起こして津軽をほとんど平定して、明智光秀をへて秀吉に移ったその領地支配証明書を獲得した。この証明書受け取りに遅れた南部氏本家は、図1と2の比較で見るように、陸奥の地を南部藩、津軽（弘前）藩で分けるようになった。この分割が幕

1）玖村敏雄、吉田松陰、岩波書店　1936年、徳冨蘇峰、吉田松陰、岩波文庫1981年、奈良本辰也、吉田松陰、岩波文庫、1981年

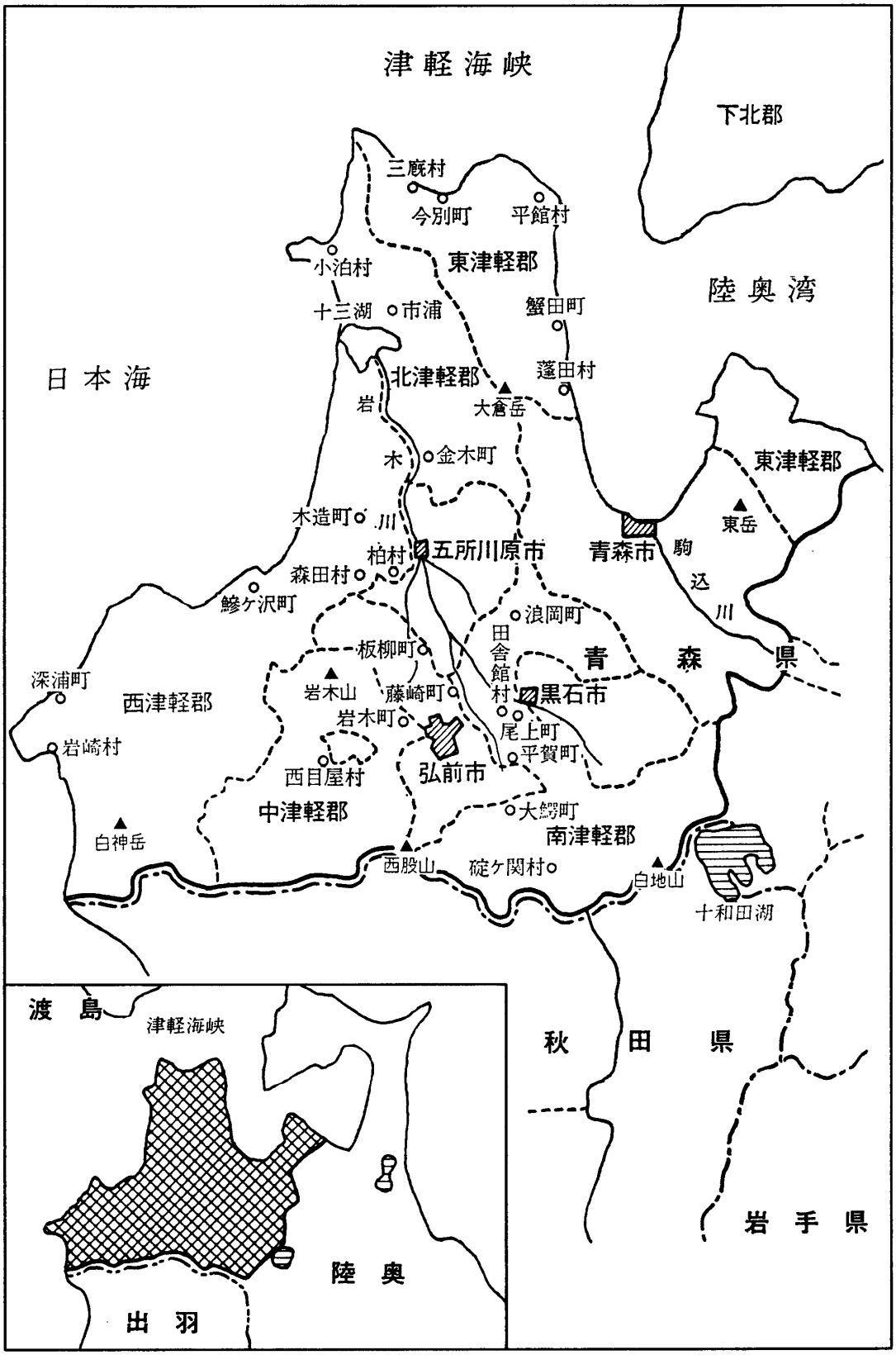
※青森公立大学

【図1】　盛岡藩領国図（『寛文印知集』による）



出典：児玉幸多・北島正元監修『新編物語藩史』第1巻、新人物往来社、昭和50年、174ページ

【図2】　弘前藩領国図（『寛文印知集』による）



出典：児玉幸多・北島正元監修『新編物語藩史』第1巻、新人物往来社、昭和50年、86ページ

末まで続いたのだった。津軽藩の成立の由来はここにあった[2)]。

石高（米生産高）本位の藩政治

戦国時代は米収穫量が兵・農民動員数の尺度だったから、徳川家康は家門序列を将軍、親戚(家門)、親藩、譜代、外様に区分し、大・中・小の石高で家格を区分して武家政治を支配した。南部藩は盛岡藩として10万石の外様中藩とされたし、津軽為信は津軽平野の高岡に築城し、弘前藩とも呼ばれ、4万7千石の外様小藩の家格とされた。

どの藩でも初期の名君と呼ばれたのは新田開発、軍事用産業の開発によってだった。南部(盛岡）藩は山林資源、下北半島まで及ぶ漁業（鼻曲がり鮭、干し鮑、海草、塩)、鉱業（金、銀、銅）等が昔から全国に知られており、工業としての箔椀の生産も著名だった。さらに畜産としての下北半島の南部馬の放牧も壮大だった。

これに比べて津軽藩では17世紀の4代藩主が名君とされているが、新田開発、治水植林で石高増大に関心を注ぎ、1694（元禄7）年には新田開発で30万石に達したとされるが、石高増大は戦国時代までのことだから、雪、気候不良の冬の東北地方では、享保期（1716～35年）以後になると、耕作難から貧しさが目立ち、藩財政が破綻していった。

とはいえ南部藩も元禄年中（1689～1703）年になると、不作飢饉続きで、岩手群北上川水系の村々では6分の5の稲の青立ちの凶作だと当時の報告書にも書かれている。また天明年間(1781～89年）は東北地方全体を覆う凶作で、その記録によれば「天明卯年の凶作に、奥州津軽南部藩最も飢饉して、足腰立てる者は四方に走りて食物を求む。飢人の来ること数万人、秋田街道は蟻の如し」と秋田からの報告で書かれている。しかもこの年の凶作は4年間も続いたのだった。

第二節　青森県の開設

会津戦争

1868（明治元）年、今から130年前、京都で徳川幕府から政権を奪取した薩摩・長州諸藩は征東軍を組織して、徳川派で京都を守った会津若松藩征討の進軍を開始した。薩摩・長州・土佐軍の会津・米沢藩への怒りはすさまじかったが「白河以北一山百文」という官軍の蔑称も支配した。迎える東北奥州諸藩は越後諸藩を加えて奥羽北越同盟を結成したものの、京都での勝敗が既に決定した以上、存亡を賭ける力は日々に衰えて、まず会津が「白虎隊、娘子軍」の哀話とともに開城し、会津藩は斗都藩と改称させられて南部藩の下北半島に転住させられた。南部藩は内部が分裂し、戦わずに占領され廃藩にさせられた[3)]。

2）新編物語藩史第一巻、北海道・東北地方の諸藩、新人物往来社、1975年

3）星亮一、敗者の維新史、中公新書、1990年、尾崎竹四郎、東北の明治維新、痛恨の歴史、サイマル出版会、1995年、早乙女貢、会津戦争、小学館幕末維新の群像第4巻、悲劇の戊辰戦争、1989年、田中彰、明治維新の勝者と敗者、NHKブックス、日本放送出版協会、1980年、物語五綾郭の秘話、新人物往来社、1988年

青森県の創設

弘前藩は近衛家と関係を持ち、官軍の北海道函館の五稜郭攻撃に参加したので官軍に評価され、南部藩領攻撃にも官軍指導のもとで勝利できた。

南部藩廃藩後の1871（明治4）年、旧弘前藩の改称の弘前県と八戸藩（南部藩）西側を吸収して弘前県は廃止され、青森県が明治政府によって新設された。そして北海道に渡航するための手段として、農地だった湾に面する地域に県庁が置かれて青森市が設定された。

青森県の言葉は南部の東、津軽の西と異なり、津軽も弘前と青森とでは異なる。130年を経過しても「ねぶた」の夏祭りは別々で異なり、全体ではまとまることがない異様さが目につく。第一に、産業では東は漁業、工業、西は農業、果樹業、中の青森は県庁、無産業で、東の農業は5～6月には「山背（やませ）」と呼ぶ太平洋岸からの冷風におびやかされている。全県として共通なのは、冬には積雪・酷冬に悩まされ、高齢者の居住には温暖化思想が不十分であり、若者の大都会への就職転住の指向が強い。

希望は人材のみ

海を隔てて北、東、西へと大陸と接する国際環境に恵まれている県は日本の本州の県には存在しない。だから青森県は日本で世界の文化の大橋になりうる可能性という意義を持っている。すなわち幕末に長州の吉田松陰が外国渡航で国際文化人になる希望を抱いて松下村塾を起こした意義を思う根拠をここで知ることができると思う。そのような人材を育てることこそが、青森県が果たすべきなのではあるまいか。では吉田松陰、そしてその思想を誰が継承して20世紀に伝えていったのかを検討することにしよう。

第一章 長州藩の吉田松陰

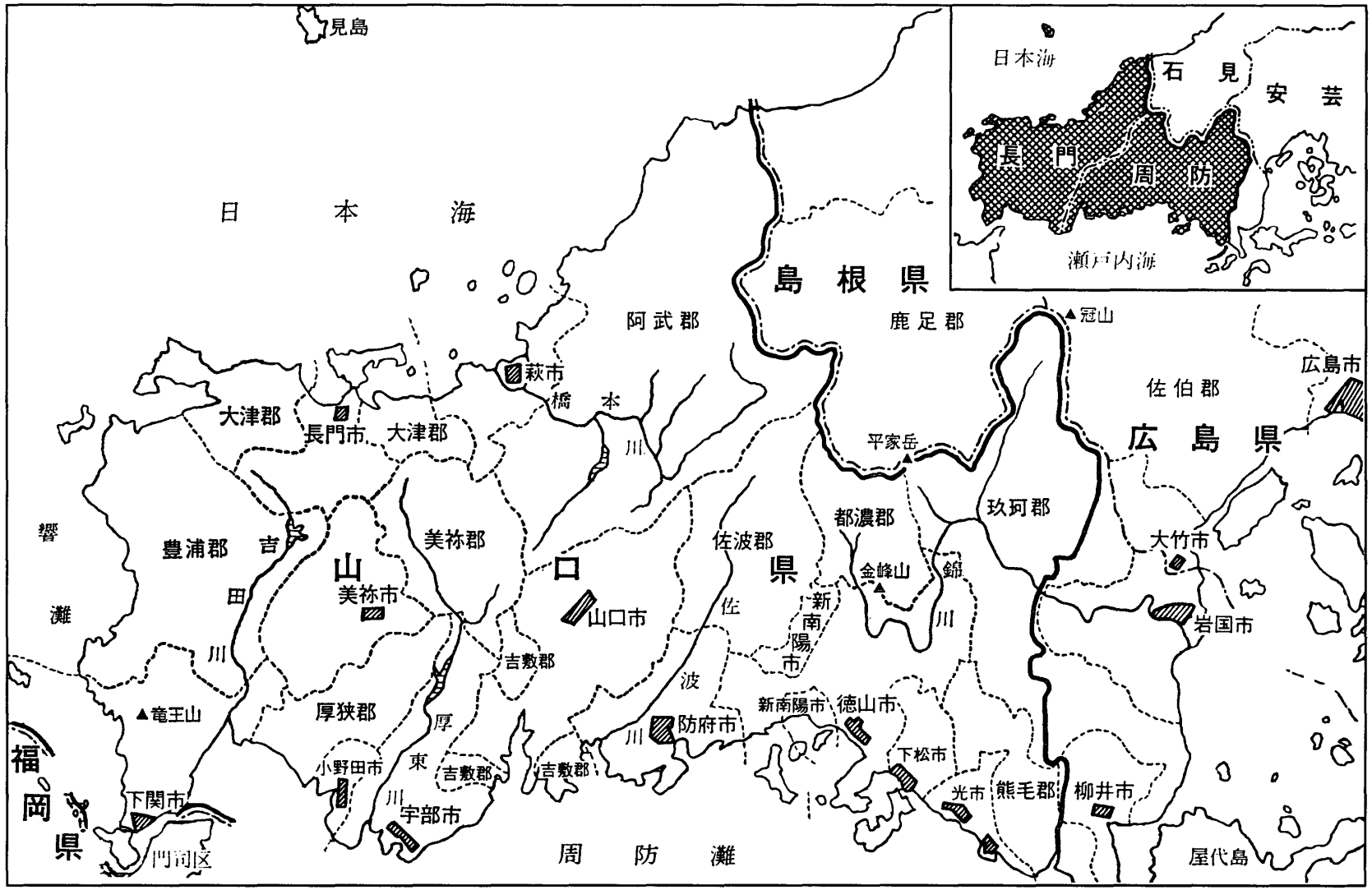
第一節 松本村での生い立ち

幕末の長州藩

長州藩は幕府時代に中国地方西端の山口県の全県を領有した外様大名で、戦国時代には岡山、島根、広島県まで含む程の毛利氏の広大な領土だったが、先にも述べたように、徳川・豊臣氏の最終決戦となった1600（慶長5）年の関ヶ原の戦いで、開戦前日の東徳川家康が仕組んだ不戦確約誓書に同調した西軍豊臣氏の盟主毛利氏が大阪城に引き上げたことで徳川軍の大勝利となった。毛利輝元は家康の誓書の内容を信じて帰国してしまい、戦後に徳川家康は毛利氏を周防・長門（防長と略称）二国の領有のみに削減してしまった。この年に徳川時代が始まるのだが、毛利氏は藩の本城が萩、支城が山口にあることから山口藩とも呼ばれるようになった。図3を参照[4)]。

4）新編物語藩史第九巻、長州藩、新人物往来社、1976年

【図3】　長州藩領国図（『寛文印知集』による）



出典：児玉幸多・北島正元監修『新編物語藩史』第9巻、新人物往来社、昭和51年、346ページ

徳川氏はその経緯からも中国道の大藩の毛利氏を自己にとって最大厳戒の対象にした。こうなった長州藩の石高は47万石で加賀前田120万石、薩摩島津77万石、仙台伊達60万石に比べて外様の最大藩とは言えなかったが、下関港を国内貿易の最重要な交通基地としていて経済力を持っており、実力100万石ともいわれていた。

徳川家康は毛利氏に警戒を怠らなかったから、毛利氏にずば抜けた逸材があらわれたことはなかった。但し、立藩者毛利元就は1593（文禄2）年に正親町（扇町）天皇の衰微を嘆いて献納を開始して以来、朝廷への献金習慣を確立した。長州藩は公家を通じて幕府からこれを許可された諸藩唯一の幕藩であった。

萩は中国山系に水源を発する阿部川が日本海に入ろうとする三角州の上の指月山の麓に建てられており、城下の侍屋敷は掘の内に毛利家一門、家老の屋敷が並び、掘の外では寄り組、大組など上級家臣から下級家臣へと家が順番に広がり、その中に明倫館、有備館などの藩校が建てられた。そこを通り抜けると、阿部川が分かれた松本川に出る。松本川を渡ると、城下町は切れて松本村になる。そこはもう農村であり、貧しい下級藩士が農民と入り交じってぽつぽつと住んでいた[5)]。

松本村の家禄26石の杉百合之助常道の家では1830（天保元）年に次男寅次郎が生まれた。松陰とは成人になって本人がつけた号であってそれまでは寅次郎の名で呼ぶことにする。杉家は築城から萩に住んでいたが、寅次郎が生まれる11年前に大火で焼失したので松本村に移住していた。父の末弟玉木文之進も同居していた。玉木はいずれ別居して隣に住んだ。寅次郎は次男で男3名、妹2人であったが、5歳の時、別の叔父吉田大助の養子になった。大助が早死したので、藩は家学断絶を恐れて文之進ほかに「家学を後見せよ」と寅次郎への無給教師を命じた。

父の百合之助は毎朝暗いうちに東4キロの山へ馬の秣を刈りに行く。5歳の寅次郎は2歳上の兄とともに松明（たいまつ）を持って父を先導していく。妹は朝食の手伝いを始める。これが杉家の1日の始まりだった。朝食が終わると、兄弟は畑に出て畦道に座り、四書五経の素読を始める。ほどなく父が出てきて田の耕作を始めて、畦道で教える。父親が読書をするのは、夕食後に米を搗きながら米搗合の上につけられた見台の上の書を読む時だけだった。

藩校明倫館教授見習いへ

暮らしは楽ではなかったが、母親の滝は萩城下に実家があり「学問好きの家の嫁にゆきたい」が念願のやさしく温かい女性であり続けた。この母からの愛育を寅次郎の初学とすると、5歳からは父、文之助から軍学、四書五経、歴史を厳しく教育された。

吉田家養子として8歳で藩校明倫館の教授見習になった。この少年が俊秀だという評判が高

5）司馬遼太郎　世に棲む日々、4巻、文春文庫、1975年、龍馬がゆく、8巻、文春文庫、1975年

くなり、藩主の慶親（よしちか）が関心を持って、異例に藩主への御前講義をさせて見た。寅次郎は家学の山鹿流の『武家全書』の中の「戦法方論」を講じた。藩主が感嘆して何回も声を上げた程の明確な論理で、藩主は「師は誰か」と問い、叔父の玉木文之進の名を聞いた。そのせいで文之進は官職に登用されるきっかけをえた。

玉木文之進 松下村塾を創設

それまで文之進は松下村で無役でいた。村の子供たちは同一階級で遊ぶことが習慣だったが、僅かしかない侍屋敷では武士は遊ぶ友達がなく、寅次郎にも武士の友達がえられなかった。そこで文之進は身分差なく子供たちが集まれる家を自宅で「松下村塾」と名づけて学問教育を始めた。その意味は松下村学校であって、魚屋の子、侍の子も区別無く通って来た。寅次郎が12歳の時だった。この塾は文之進がその3年後に八証人役という常勤職に登用されて村を去るまで続いた。

久保五郎左衛門

玉木が村を出てから、寅次郎の別の叔父の久保五郎左衛門が隠居して文之進の家に住むことになり、名も松下村塾と変わらず、近所の子供たちを無料で教えることを引き継いだ。その教育は松陰が1850（安政2）年に帰郷した時にも継続していた。だから松下村塾は松陰が創立したわけではない。

第二節 藩校明倫館教授へ

明倫館教授へ

長州藩は外様大名であり、徳川支配体制に忠実であることが存続の要件だった。藩制度として明倫館、有備館のような藩士教育を整備することもその体制の要件であって、とくに若い教育者による育成に熱心であることが求められた。長州藩では藩主から10歳台の若年教育候補者に対して親試があった。親試では藩主が明倫館に出席して教師に講義させ、口頭試問をした。寅次郎に対しても10、12、14、16、18歳と親試が繰り返された。例えば12歳の親試では、武教全書を講義させ、題を与えて漢詩をつくらせ、14歳親試では、当日になって予定をやめて突然に藩主慶親が、不意に「孫子を聞きたい、虚実編を講ぜよ」と命じた。準備皆無なのに寅次郎が整然と講義したので、藩主は感動して所蔵の書を褒美としてあたえた程だった。

寅次郎は明倫館での講義のために官設家庭教師から長沼流兵学、西洋陣法などを学んだ熱心な勉強家だった。寅次郎の山鹿流兵学は政治学に属する学問体系であった。寅次郎は18歳の親試で独立師範の資格ありと評価され、教授見習いを終了して教授に任命された。

明倫館は翌1849（嘉永2）年に改築され、寅次郎は膨大な学校規則の作成を命じられてその任務を果たした。そのこともあって、お手当て御内用掛（外冦お手当方の情報偵察員）として、沿岸防備状態の視察という旅行を与えられた。藩外旅行視察のことである。

藩外親友の獲得

1850（嘉永3）年、寅次郎は成人し、松陰と号した。ここからは寅次郎ではなく松陰と呼ぶことにする。松陰は山鹿流で高名な松浦藩平戸への10か月間の藩外留学を許可されて出発した。この旅行での最大の収穫は始めてすぐれた人とその著書への接触であり、松陰は借りた著作の筆写に明け暮れた。その人々への接触の最高の成果は、肥後熊本藩の宮崎で宮部鼎蔵という医学、山鹿流の学者に会ったことであり、宮部はこの時から生涯の親友になっていった。この時、宮部は来年には江戸に行くと伝えた。

江戸留学

留学から戻った松陰は宮部の話から江戸行きの希望を提出した。藩主の江戸参勤への出発が来年3月だということが幸いして松陰が供に加えられ、1951年4月、松陰は江戸に到着、5月には熊本から宮部鼎蔵も到着して親交が始まった。

松陰は酒、煙草をたしなまず、女性とも交流せず、剣術、馬術も不得手で運動神経に欠けていた。関心は旅に出て観察すること、師友をえること、書を読んで考えることにあった。

東北旅行、脱藩罪で帰藩

再会で喜んだ松陰はオランダ、イギリス、フランスなど外国関係に関心を持っていた。そこで防備皆無の東北地方の実態見学を提案し、私費による見学旅行願書を藩屋敷役人に提出した。この頃は箱根関所以外は武士の関所手形は実際には不要だった。そこで宮部、松陰は時間がかかる手形交付処理を待たずに、12月末に江戸を出発した。旅は会津若松藩、南部藩、津軽藩、北端の龍飛岬までの往復120日間だった。津軽藩では弘前城下で2泊した。

江戸に帰った所、幕府を恐れる長州藩役人は無手形脱藩の罪を恐れて、形どおりに松陰の届出書を提出し、まったく形どおりに手落ちの罪で松陰は護送で帰藩となった。長州藩では処分は処分として11月、明倫館教授を解職したものの、「実父百合之助のハグクミ」という罪で、今後10年間は諸国武者修行に出すと判決した。この素晴らしい判決に沿って1853（嘉永6）年1月、松陰は萩を出た。

激動時代の開始

徳川時代は文化文政時代（1804～29年）の欄熟に入り、その中期後には諸藩の財政破綻も拡大し、天保大飢饉（1832年）、大塩平八郎の乱（1837年）、開国思想弾圧の蛮社の獄（1838年）など元には戻らない時代に入っていた。その決定的な流れは外国船の来訪であった。すなわち、ロシア艦が1803年、イギリス艦が1808年に長崎に来航し、幕府は1825年に外国船打ち払い令を出した。幕府も1808年には間宮林蔵に樺太探検を開始させていた。

そして1844（弘化元）年、オランダ国王からイギリス・フランスの阿片戦争の報道とともに開国勧告国書が到着する状況になっていた。明治維新までもう24年しか残っていなかった

のである。

防長大一揆の長期化

長州藩でも、松陰が生まれた文化文政の末年の（1830天保2）年には大一揆が発生した。これは藩財政困難化の救済のために、藩が産物会所を通じて流通全統制を施行したことに原因があった。しかもこの時期には藩主たちが僅か数か月の在位で次々に死去しづけるという指導力の無さがあった。例えば8歳だった松陰が明倫館教授見習になった時、藩の負債総額が通常歳入額の3 4倍に達していた程だった。

藩がようやく問題解決の具体化に乗り出したのと1938（天保9）年で、50石の中級藩士村田清風が玉木文之進などを糾合して天保改革案実施に踏み切ってからだった。だが、蒲財政を公開して減税したことで一時は小康を得たのだが、農業生産物を下関会所に集中し、農家資本出資で運営するとする財政救済政策を打ち出したことから、その政策で利益を得ない武士間で内紛が激しく、村田清風は1845（弘化2）年についに失脚して、それ以後も内紛が延々と続いた。結局、その内紛をともかく静めたのは清風の後継者である周布政之助派の1858（安政5）年の安政改革で、周布政之助は藩政府指導者として幕府の第一回長州藩征伐で総参謀の薩摩藩の西郷隆盛軍に敗れて1864（元治元）年に自殺するまで指導していったのだった。

鎌倉瑞泉寺で

それはともかく長州藩を出て江戸を目指した23歳の松陰は、瀬戸内海の三田尻（現在の防府市）から大阪湾まで航行して上陸し、五条で勤皇思想の森田節斉に入門、木曽街道をへて鎌倉瑞泉寺の知己の竹院佳職の寺で1ヵ月を過ごした。洋学を知るために外国に渡ることを思いついたのはこの時だったとされている。竹院住職は江の島での旅館で出された焼き魚に箸を付けない松陰が問われて「今日は先君の命日ですから」と答えたことを聞いて、「物事の大事はああいうような人でなくてはできないものだ」と述べたという。

ペリー艦隊浦賀へ

6月1日、鎌倉を立ち、3日には江戸の佐久間象山を訪ねた。この日の午後、アメリカのペリー指揮の4隻の鑑が浦賀に来た。松陰は浦賀に駆けつけて情報を求めて9日まで滞在した。ペリーは幕府代表との久里浜会談で来春開港決着のために来日することを宣言して去った[6)]。

その際の松陰の思考経路が分析されている。すなわち松陰はこの問題を「総合感覚」で取り上げたという。すなわち、自分のあらゆる知識を総動員して、そこから法則、原理、思想、自身の行動基準を引き出して、それでえた結論について自分の責任として行動したというのであ

6）奈良本辰也、左方郁子、佐久間象山、清水書院、1975年

る。すなわち自分はあらゆることについて原理に戻り、原理の中で考えを純粋にしきって思考する。そうすればその思考から自分の行動が飛躍して出てくるとしたのだった。

松陰の提案書

その代表例がこの時に書かれた文書だろう。松陰は9日から3日3晩をかけて「将及私語」（しょう・しごに・およぶ）と題する文書を書き上げて長州藩主に送った。すなわち、「ペリーは来春に幕府の返書を受け取りに来日する。もしもペリーの要求書どおりでなければ必ず一戦に及ぶ。その時期へ余すのは5～6か月であり、その時には日本の存亡を賭けた戦いが起こる。各藩は藩内外の賢者を藩主の側に置き、その賢才の衆議の決議を藩主自ら実行指揮する組織に変革せよ。藩は其の時に備える準備が必要である」。

松陰は革命家ではなかった。だがこの文章は徳川時代の藩制度の危機に対抗するための国としての変革宣言の提出であり、これから15年後の政治変革の到来への松陰の予言を示した文書だったと思える。

この文書は佐久間象山の閲読をへて長州藩主慶親の手に到達した。松陰は前回の江戸行きの時に会った象山を師匠と仰いだ。象山は前回、松陰に「オランダ語、論語を勉強せよ」と言うばかりだった。オランダ語は当時の日本では唯一の西洋文明語だったし、論語は松陰への激情の鎮静剤としての象山の思いやりの言葉だった。萩にいた松陰が西洋語不得意というのは事実だった。

同じく激動の時代に生きて坂本龍馬のような若者たちを育てた幕末の思想家として念頭に出るのは勝海舟（1823～1899年）である。勝は無役の御家人の家に生まれたが、オランダ語を学んで西洋兵学を研究して国事に役立てる志を立てて1845（弘化2）年、23歳で永井青崖を師として入門した。勝は松陰よりも7歳年上であり、江戸と萩という文化の差が残念に思えてならない[7)]。

ロシア艦隊を求めて長崎へ

ロシア艦隊がペリーと同じ要求を掲げて長崎港に入ったという風聞が入り、象山に相談して留学の賛成をえた松陰は長崎に急行した。20月、松陰は熊本に入り、宮部鼎蔵に会った。松陰は長崎に入ったが、4隻のロシア艦隊はクリミア戦争開戦の情報で対日交渉を変更して既に出港していた後だった。松陰は落胆もせずに江戸に戻った。

松陰の江戸での宿は旧知の鳥山新三郎の塾で、鳥山は安房出身で私塾を開き、長州藩士とも懇意で松陰とも親しかった。ここで長州藩の足軽で脱藩した金子車之助と同居して金子は松陰の最初の弟子になった。松陰はここでロシア艦でのロシア留学への夢を語り、ついで来年来日のペリー艦隊への乗り込み留学計画を話し、金子の熱狂的な参加希望を承諾した。

7）奈良本辰也、高杉晋作、幕末・維新の群像第三巻、龍馬と志士たち、1989年、子母沢寛、勝海舟、第一～第六巻、新潮文庫、1995～6年

第三節　再来ペリー艦隊乗り込み活動

金子とともに下田港へ

1854（安政元）年1月6日、アメリカペリー艦隊は8隻の艦隊で大統領の国書を持って開港貿易条約締結を求めて江戸湾に来た。24歳の松陰は清潔な身辺の日々にあらわれる強い個人の自尊心から、民族的自尊心を溢れさせて『海戦策』と題する攘夷論を長州藩主に提出した。

すなわち江戸視察の上で、第一段を海戦、第二段を上陸撃退の陸戦、そして艦隊帰米1年後の再来襲の到来に備える軍備・兵訓練を第三段とした。このような戦術論は日本として最初の理論であり、これは攘夷戦術論として著しく流布して勝海舟も学んだ。

実際にも1864（元治元）年、4国連合艦隊との長州藩の下関海戦で展開された。だが長州藩では基礎準備無しで松陰の理論どおりには進まなかったが、そのころの戦術論はこれ以外には皆無だった。

これを藩主に提出した後、松陰、金子は宮部鼎蔵を含む長州藩、肥後熊本藩の7名の仲間を招待して3月5日に別離の宴を開き横浜村へ出発した。この時に集まった仲間で明治元年まで生き残っていたのは僅か一人だった。

乗艦拒絶で逮捕

ペリー艦隊が江戸湾から移動して下田港に入ったのは22日で、漕ぐ小舟、漕ぎ手を見つけるのに手間取り、結局は2人で旗艦ポーハタン号に漕ぎついて「世界を見たい、アメリカへ連れて行ってくれ」と松陰が通訳官に日本語で懇願した。ペリーは「通商条約締結直後で日本政府が日本の法律を守ってくれとの依頼なので、日本人の逃亡に加担することはできない」として、2人はボートで福浦の海岸に送り返された。2人は名主に出頭し、下田奉行所で狭い畳1畳もない檻に2人一緒に押し込められて路上に晒され、そのままで江戸の伝馬町の獄に送られた。取り締まりは北町奉行だったが、獄内の牢名主、囚人たちが松陰の優しい話に感動して聞いた記録が残っている。

長州藩萩での入獄

9月3日、2人は長州藩に身柄を移されて、檻かごに乗せられて10月24日、萩に戻り松陰は城下の野山獄に収容された。足軽で脱藩の金子重之助は百姓牢である向かい側の岩蔵獄に入れられた。冷たい3月の海、浜での風、それらによる風邪、呼吸病から肺炎を併発し、皮膚病も江戸の獄で化膿して、金子は苦しみながら死亡した。松陰は襦袢1枚になり、衣類を金子に着せて、松本村の父、兄にしきりに手紙を送って医者、薬を依頼し、金子の死を嘆いて回顧文を書き、獄中の食事を減らして金子の墓を建てる費用にあてようとした。

野山獄は土分牢ということで畳2畳の独房で向かい合い12室の編成であり、牢名主制度はなかった。一人は女性受牢者だった。受牢期間は5年とされたが50年の受牢者もいた。封建時代の家制度だから、家・親族で具合が悪い人間を食費、諸費負担で藩に頼んで適当に受牢させる

委託制度があり、その女性受牢者は男好きで姦淫罪の身持ちが悪い刑として受牢させられていた。

入牢早々に松陰は、これを機会として優れた受牢者を師匠として習い事をしようと申し出て受牢者に歓迎され、書道、俳句などが始まり、松陰は孟子の講義をした。受刑者の中の富永弥兵衛は明倫館の秀才として知られており、松陰は出獄してから富永の出獄を運動して松下村塾の教師に招いた。また松陰はこの時に始めて俳句を学んだ。

松陰はまったく強い女性関係はなく没したのだが、高須久子には心が動いたように資料から読み取られる。後に松陰が安政の大獄で萩から江戸送りにされた別れの時に、久子は「一声をいかで忘れん、ほととぎす」との俳句を送った。久子は明治まで存命して松陰のことを語りつづけていたという。

松下村塾で教育開始

松陰の事件は幕府としてまだ厳刑にする意思はなく長州藩に対して「自宅で蟄居させよ」と命令するだけだった。松陰は受牢1年2か月で「実家で禁固」という釈放で1855（安政3）年12月に出獄し、自宅の仏壇の間（3畳）に監禁という次第になった。

隣家の久保五郎左衛門は松下村塾で無料で近所の子供たちを教えつづけていた。自宅監禁だから松陰のところに子供たちが来ることは黙認された。松陰は子供を「あなた」と常に敬語で呼ぶ優しい人間らしさを持っていたから、松陰は久保との共同教育の師匠にたちまちになっていった。

武士身分以下の子供たちに学問を教える寺子屋は萩以外にはない。しかも時代はすさまじく変化し、松陰も変化を経験していた。少年の心を転換させ育てる唯一の揺り籠と師匠が松下村塾として生まれていた。松陰が松下村塾で教育を開始したのは1855（安政2）年であってその期間は僅かに3年に過ぎなかった。だが松陰は幼い子供たちへの読み書きの教えは久保に任せて、通常の長州人とは少し人間離れした奇才をひそかに求めた。金子への思いが残っていたのだろう。

この萩の寒村から育った青年人材は列記できないほどの多数になり、やがて松下村塾党と呼ばれるほどの長州藩を変革する人材群を生み出していくのであった。

久坂玄瑞

久坂（くさか）は6歳で高杉晋作とともにある私塾に通って秀才と呼ばれたが、家は家禄25石の藩代々の典医の次男であり、やがて明倫館に通学したが、両親が相次いで死去し、兄の長男も急死したので、家を継ぐために藩医学所に転校した。ところが兄が抱いていた攘夷思想を受け継ぎたいと考えて、松陰が松本村に戻ったので長い論文を送って入門をゆるされたのだった。松陰は最初に出会った元瑞の純粋さを愛して、妹を配偶者としてめあわせるほどになった。

高杉晋作、品川弥次郎

150石の能吏の家系の長男に生まれて明倫館に通学した高杉晋作は1857（安政4）年、18歳の時、友人の17歳の玄端に連れられて松下村塾を始めて訪れて入門した[8)]。その時に訪れた塾の裏で自炊していたのが14歳の品川弥二郎で、品川家は罪人の斬首を検断する下士の足軽世襲職であり、「自分の家は世襲だが、私は人を助ける人間になりたい」と入塾を志願してきた。弥二郎は鈍才だったが松陰は正直で陽気な少年だとして住み込みの弟子にしていた。

10畳半への塾の拡大

松下村塾が塾料無料であることは設立以来のことだが、入門者が急に増加してきて農具小屋をも転用してきた8畳間にひしめくようになった。そこで近所の古家の売りを吉田捻麿（としまろ）が聞き出してきて、全員で解体・古材運送で10畳半、土間1坪の塾舎を建てた（現状保存の通り）。晋作、伊藤俊助（伊藤博文）は同じ頃に入門したのだが、晋作は高吏の長男だから幕府唯一の官吏学校である昌平黌（しょうへいこう）に入学を指定されて1858（安政5）年7月、江戸に去った。

安政の大獄

この事件は江戸時代が明治維新への口をあける画期的な事件になった。すなわち、アメリカ・ペリー艦隊の来航、それに誘導された幕府の多数国との通商条約の締結で幕府の国内権力の激減、それまで陰であった朝廷、公家の反幕府活動の蘇生が急に生まれて、この苦境の突破を狙った1858（安政5）年4月の彦根藩主の井伊直弼（なおすけ）の幕府大老の就任をきっかけとする安政大獄がそれであった。井伊大老は越前藩主の間部詮勝（まなべ・あきかつ）を老中として朝廷からの通商条約批准承認を獲得すると同時に公家の買収、反対の大名、武士の大弾圧を計画・実行した。

松浦亀太郎は村の魚屋の子で品川弥二郎のように松陰に愛された。亀太郎は絵師を志したが絵師が凡庸で果たせず、松陰が画いた松陰の絵象は松陰の唯一の絵象として現在でも知られている。亀太郎は魚屋の職業を利用して京都に出てはえた有用な情報を松陰に送る役割を果たした。亀太郎は松陰の死後、絶望して京都の東山で切腹して果てた。

29歳の松陰は松本村に蟄居しながらこれらの得た情報を分析し、老中間部の襲撃を長州藩に提案して藩庁を当惑させた。松陰は藩庁の思想も自分と同じ筈だとする楽天的な軽率さを持っていた。

8）古川薫、高杉晋作　わが風雲の詩、文春文庫、1995年

松陰の刑死

井伊大老は攘夷思想知名度か高くない松陰にまで探索を及ぼしており、松陰を江戸へ送れと長州藩に命じた。周布政之肋は仰天したが、松陰はむしろ喜んで、この命令から自分は刑死するだろうが、公式の場で日本救国の方策を述べることができるのだと受け取った。周布は若狭の人、梅田雲浜（うんぴん）が松本村で一泊しただけの関係と軽く考えたが、井伊大老の弾圧と周布の見方には天と地の政治思想の開きがあった。

江戸に昌平黌生として滞在していた高杉晋作は、師匠の幕府護送到着に狼狽して、老獄役人、同室囚人へのつけ届け、松陰の往復書状の安全確実などのつけ届け工作などに日夜の奔走を続けることになった。調べは7月9日から江戸城の和田倉門外で開始された。取り調べ官吏は寺社奉行、大目付、南北町奉行、吟味役という物々しさで長州藩の楽観視を吹き飛ばした。尋問は橋本左内、頼三樹三郎とは別に10月 5 日までおこなわれつづけた。松陰は容疑過少だから死罪も遠島もなしと楽観視するほどの予想を語った。

だがここが吟味役の技術への松陰の無知の悲しさであった。まして松陰は質問もされないのに、老中間部への待ち伏せ計画を進んで述べたりする単純さだった。実は吟味役は長州藩江戸屋敷の幕府派長州藩士から多くのかんじんな情報を既に獲得していたのだった。

1857（安政6）年10月27日、松陰は死罪を宣告されて、伝馬町の獄で死刑が執行された。29歳。晋作は父の心労で萩に呼び返されていた間のことだった。

第二章　高杉晋作と御楯組

第一節　松陰の埋葬

埋葬の戦い

高杉晋作は急いで江戸に上がり、松下村塾員を集めて「御楯組」と呼ぶ擬夷決行決死団をつくり、晋作が騎馬を指揮して1863（文久3）年正月3日、小塚原刑場で松陰の死体を掘り出して大甕（かめ）に納めて、徳川家所有の上野寛永寺にまで行進してそこに埋葬した。

晋作へは長州藩は帰藩を命じたものの藩主はなんの罪をも下さなかった。長州藩は後に大甕を世田谷・若林に移し変えて松影神社を建てた。後に長州藩と公然と敵対関係に入った1864（元治元）年になって幕府は松陰を含む墓、神社の建物などを粉砕して報復したりしたが、松陰の墓は現在も萩にある。

井伊大老の最後

1858（安政5）年に朝廷の意向を無視して幕府大老の井伊直弼が米・英・露・蘭・仏との開港通商条約を呑んで、安政大獄によって反対勢力を刑死させたことから、明治維新への内乱の口火が切っておとされたことを述べた。井伊大老は1860（万延元）年3月 3 日、水戸浪士ら18人によって桜田門外での行列行進中に惨殺された。

第二節　長州藩の高揚と四国艦隊との海戦

天皇の攘夷実行命令と長州藩

関門海峡を通過する外国艦船への攘夷を実行するために攘夷派公家を抱き込んで天皇が幕府に実行の勅命を出す事件が起きた。松陰の1854（安政元）年の「海戦策」の提言が事実になった。困窮した将軍家茂は1863（文久3）年10月から攘夷を実行すると返答してしまった。幕府は横浜港閉鎖を5国に提案して紛糾状態に陥ったが、5月10日、アメリカの貿易商船が下関海峡にさしかかり、長州藩の軍艦、沿岸から砲撃されて上海に向けて逃亡した。日本の内外戦乱がたちまち頂点に駆け登った。6月11日、横浜から完全武装した軍艦ワイオミング号が戦闘準備で瀬戸内海から出撃し、5日にフランス巨艦2隻も長州藩にあらわれて戦艦、沿岸砲台を砲撃してこれらを全滅させた。攘夷戦争はこれで開戦になった。

アメリカ、イギリス、フランス、オランダの四国の要求は損害賠償要求であり、1864（元治元）年7月、総艦隊17隻が長州薄艦隊を関門海峡で砲撃した。松陰の「海戦策」を前準備もせずに戦術だけを模倣しただけで、長州藩は完全な惨敗で講和交渉となった。イギリスは下関港の西の彦島を清国の香港同様の租借地にする目的も持っていたのだから、遊戯をしていたわけではなかった。

高杉晋作と奇兵隊の設立

高杉晋作の思想は吉田松陰の思想を受けてずば抜けていた。長州藩では、松陰死後に短期間の上海滞在経験者になって清国状況を知った26歳の晋作を講和交渉のための臨時筆頭家老に、イギリス滞在経験者で松下村塾出身の伊藤俊輔、井上間多を臨時通訳に抜擢して連合艦隊と海上交渉させた。晋作は処理責任を巧妙に幕府に押しつけて最終処理に成功してしまったが、「海戦策」の松陰の提案を、長州藩は臨戦組織づくりの緊急性を根本から体験したのだった。

松陰はフランス革命を学んで、日本では神聖なのは天皇だけで、将軍以下の人間はすべて平等であるとする、当時の日本人としては勝海舟を超えた、非常な危険思想にたどりついていた。当時の学者、武士の思想は　土地は幕府、将軍からもらったもので、藩主は将軍の家来として所有者の身分で最高位の人間だとする思想だったのである。

高杉晋作は、短期の上海生活を実体験して、のんびりした天皇、だらだら生きている武士ではなく、富裕な商人を金主として農民、職人を問わない人民の救国動員組織こそが藩の基盤だとする思想に到達した。そこでこの敗戦交渉から、内乱を救う藩の軍人組織として組織化に乗り出したのが「奇兵隊」であって、奇兵隊は身分、門地、姓名を問わない、日本最初の近代的軍事組織であった。この思想は藩内保守派武士には勿論、幕府、他藩でも「奇兵隊」を厄介視していたのでつぶしにかかったが、晋作の思想は変わらず、明治初期まで続いて長州藩の思想の原動力として具体化していくことになった。

第三節　久坂元端の京都活動

京都攻防戦の開始

1858（安政5）年の井伊大老の安政大獄が幕末戦争の開始だったということは既に述べた。長州藩は朝廷献金の実績から反幕府の公家に接近する役として松下村塾出身の久坂玄瑞が工作責任者となり、長州藩は大勢力を京都に派遣して反幕府攘夷の風潮を固めてきたが、京都の主力は勿論依然として幕府権力であり、長州藩に対抗して外様の薩摩藩も登場してきた。薩摩藩は西郷隆盛、大久保一蔵（利通）などが長州藩を5万石いの海無しの小藩に追い落とす狙いを持ち、幕府の京都警護役に任じられた会津若松藩と密通し（薩会盟約）しており、1863（文久3）年には将軍家茂、将軍後見職慶喜も上洛し、京都は騒乱の集中地になった[9)]。

とはいえ、尊皇攘夷、攘夷親政、公武合体、尊皇開国などの諸思想から明確に次の2 0世紀日本を透視していた人は幕府の勝海舟、その門人になった坂本龍馬、高杉晋作などほんの少数で、歴史の正面には出てこないのが日本人の歴史だった。例えば孝明天皇は強烈な攘夷思想で、外交権は天皇にあったが政治実力はなかったから、紛糾と混乱を重ねていくことになる。

クーデター7卿落ち

ことは1863（文久3）年10月に幕府将軍家茂が攘夷実行を天皇に約束することまで進んだのだが、前述のように長州藩が5月に下関でアメリカ商船を砲撃して壌夷戦争を開始してしまって筋道が通らなくなってしまった。しかもそのあとで1863（文久3）年8月18日に、薩摩藩、会津藩軍が天皇御所の9つの内門を武力で閉鎖して公武合体派の中川宮などを入れるほかは攘夷派公家7名の入門をを阻止して宮廷から追放するというクーデターを実行した。追放された攘夷派公家は長州藩に引き取られたので「7卿落ち」と呼ばれている。

この会津、薩摩藩のクーデターでは新撰組による京都での池田屋襲撃事件も加わって敗れた長州藩の憤激を呼び起こし、孝明天皇奪回行動として木島又兵衛、久坂玄瑞たちを指導者とする大軍を京都御所に送りこむことになった。この攻防戦が「禁門の変、蛤御用の変」と呼ばれ、戦闘は1864（元治元）年7月19日に終わったが、京都は3日間にわたって家屋2万8千戸が消失する大事件になった。久坂玄瑞はこの時に死去したが、松下村塾党の旧尊王攘夷思想はこの時で消滅したといえる。

第一回長州征伐

この孝明天皇、「薩会盟約」は長州藩攻撃、攘夷としての横浜港閉鎖などクーデター政権の確立の好機になった。8月、禁裏後守衛総督に任じられた一橋慶喜は進言して京都で軍議を開き、勅命で長州藩への討伐出兵を西南21藩に命じ、総督参謀を薩摩藩の西郷隆盛として総攻撃開始日を11月18日とした。

9）田中惣五郎、西郷隆盛、吉川弘文館、1958年、林房雄、西郷隆盛、12巻、徳間書店、1974～75年

長州藩には迎撃力がもう存在しないので藩主退任、家老切腹自殺、一戦もまじえず降伏の道を選んだ。周布政之助の自決もこの時だった。26歳の高杉晋作は博多に逃亡した。奇兵隊軍監に昇進していた山県小助がこの逃亡を助けた[10)]。

第三章　松陰の無二の知己

桂小五郎

第一回長州征伐で西郷隆盛が求めたのは長州藩の対敵人材で周布政之助、高杉晋作、桂小五郎などであった。

桂小五郎は藩主侍医の20石の和田家の次男に1833（天保4）年に生まれて六歳に90石の大組馬回り役の桂孝古の養子となった。久坂玄瑞とは医家の子として幼児から親しかった。11歳で明倫館に入学して漢学を学び、1846（弘化3）年の13歳、1850（嘉永3）年の17歳の漢詩で藩主の賞をえるという秀才だった[11)]。

その翌年には松陰の兵学を聴講してこれが松陰との接触の開始となったが、小五郎は貧しい松下村塾には入門しなかった。だが松陰は日記に小五郎を「無二の知己なり」と読んで交際信頼を深めていったことを知ることができる。

斉藤弥九郎

和田家は富裕であり、江戸の剣客として著名だった斉藤弥九郎が門下生の留学を長州藩明倫館に求めて来たことを聞いて、自費留学生となることを思い立ち、1852（霧永5）年に江戸に上京した。斉藤や弥九郎は千葉周作とともに水戸、長州藩の門下生を集めており、水戸藩の藤田東湖も小五郎とは同門だった。弥九郎は剣道に加えて四書、兵学をも教えた。

松陰の相談

1852（嘉永6）年8月、小五郎が18歳の時前年にペリーが来航し浦賀で翌年の再交渉を予告して退去したためにその防御砲台の急速建設が始まった。小五郎は師匠斉藤弥九郎の弁当持ちを志願して新設の品川お台場の工事現場に日参した。

その9月16日、松陰から相談したいという手紙を貰った。松陰は東北旅行に出掛けたことで藩籍を削られ　諸国周遊を許可されたので上京し、プチャーチンのロシア艦隊が長崎に出現したので、これに乗船してロシアで学びたいという相談だった。小五郎は松陰に逢ってそれに賛成した。小五郎は松下村塾出身ではなかったが、既に久坂玄瑞、高杉晋作と並ぶ松陰の友になっていたのだった。

松陰の計画はつぶれて井伊大老の安政の大獄となるのだが、その間に小五郎は帰国した時、

10）吉田薫、高杉晋作、わが風雲の詩、文春文庫、1986年

11）村松剛、醒めた炎一木戸孝允上下2巻、中央公論社、1987年、古川薫、桂小五郎、2巻、文春文庫、1984年、大江志之夫、木戸孝允、幕末維新の群像第4巻、小学館、1989年

松本村に出掛けて松下村塾を訪問したことがある。松陰が大獄で上京になった時、小五郎は高杉晋作の松陰救援活動に匿名で醵金しつづけたが、遂に松陰を失った。

第二節　松陰思想の具体化へ

周布政之助との連携

長州藩では周布政之助が唯一の藩政革新の指導者だった。小五郎は1858（安政5）年に江戸藩邸大検使（財務主任）に21歳で抜擢任用された。これは松陰が小五郎の直目付への登用を周布に熱心に推薦していたからであった。藩政に返り咲いて右筆、手元役という人事権を握った周布が松陰の推薦に反応したからであった。

久坂玄瑞は朝廷、公家への金銭運動の大役を果していたが、公家の吸収には思想とは別に多額の金銭供応が不可欠で小五郎の財務主任の役が決め手になり、小五郎は高杉晋作とも共に密接に連絡しあわなくてはならなくなった。小五郎は玄端、晋作以外の人々と目先の繁忙で追いまくられていたが、松陰の「海戦策」から先進外国からの防御には長期間、膨大な武力準備が肝要であることを学んでいて、その思想を具体化してくれる人材を探していた。

村田蔵六

小五郎はその人材を遂に発見した。村田蔵六だった。村田蔵六は長州藩の周防（山口の南）の医師に1824（文政7）年に生まれて1844（弘化年間）に蘭学、医学を学び、1843（天保14）年には長州藩では職がないので緒方洪庵から蘭学、医学を学んで塾長を勤めた。ペリー来航になって漸く宇和島藩士に採用されて西洋兵書の翻訳、軍艦建造を指導するようになり、さらに宇和島藩士として幕府講武所教授を勤めて英語をも習得した英才であった。

小五郎は長州藩にとって洋式技術の蓄積、軍事組織の生成・発展が不可欠であることを深く認識していたから、故郷に定職を持ちたい村田に着目してその招致に成功したのであった[12)]。

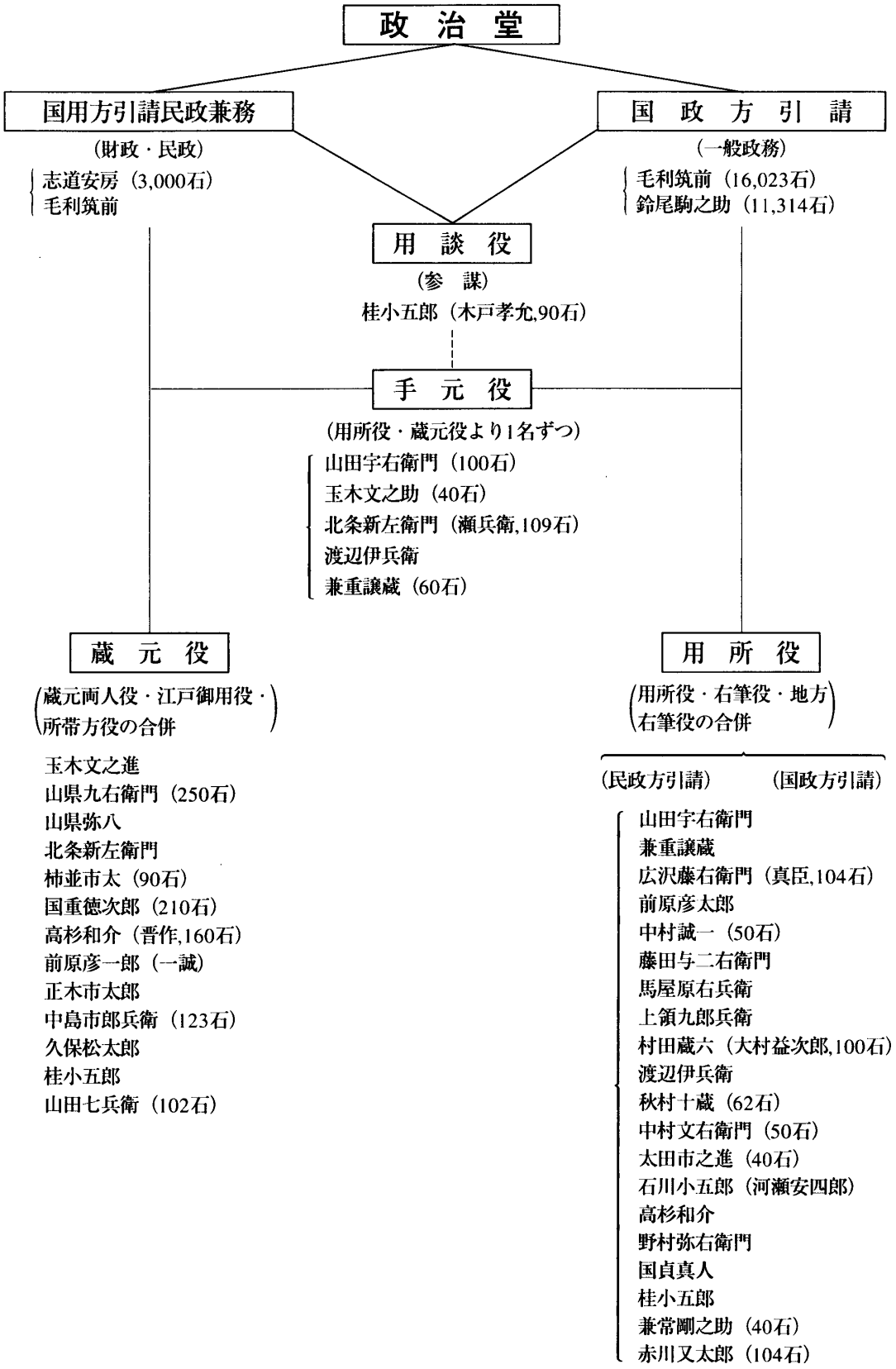
第三節　桂小五郎の長州藩の再建

長州藩再建の開始

小五郎は禁門の変まで京都で活動し、1864（元治元）年の長州藩の行動にはあくまで反対で久坂玄端と袂を分かったが、京都では反薩摩の巨頭として兵庫に潜伏逃亡していた。1865（慶応元）年11月、小五郎は京都で馴染みの愛人幾松（後の夫人）と共にようやく萩に戻ってきた。長州藩は京都の政治から追い落とされ、藩内は保守派に満ちて、高杉晋作は九州に逃げ、坂本龍馬は勝海舟の海援隊に熱中し、周布は亡く、小五郎は人材の再建、組織化に全力をあげなくてはならなかった。

12）司馬遼太郎、花神、3巻、新潮文庫、1976年

【図4】　長州藩　桂小五郎時代の藩政（慶長元〜二年）



備考：芝原拓自著『明治維新の権力基盤』および田中彰著『明治維新政治史』研究より
出典：小西四郎著『日本の敵視、開国と攘夷』中公文庫、昭和49年、362ページ

小五郎が長州藩江戸財政で20歳代から鍛練されたことは既に述べた。この時期の藩の力は財政と武力と兵である。兵は高杉晋作創設の長州藩独特の民衆組織としての「奇兵隊」が幸いにして残っていた。武力は軍艦、大砲、小銃、爆薬は外国製として輸入可能であり、その訓練には村田蔵六の技術、知識が揃っているし、外交は村田の知己への依存が可能である。残るのは唯1つ、財源である。小五郎は周布政之助に代わって国政相談役に任じられ　財源の発見に全力を投入した。

財源の発見

小五郎は財政の中で藩主保管として別枠になっている蓄積金に注目した。その1つは長州藩が蓄積して藩主保管とされている厚生福利制度であった。すなわち藩士は末期養子の届出をしないかぎり、死後には知行地が没収されるとする終身雇用制度があった。実際にこういう制度があっても武士を離れることがあり、長州藩ではそれによって知行地を離れた場合には、知行地は没収されるが、その3分の1は撫育金として、その地を貸し付けて得た利子を藩主の手持ち金として保管し、知行地を没収された家に支給するという制度だった。もう1つは、藩の3ヵ所で商業を営む商船に投資貸し付けをする金融制度があり、藩主の手持ち金として保管されていた。

これらの藩主保管金は200万両が残っており、財源は十分であった。

再建の具体化

国政組織図は図4で見るとおりである。小五郎は参謀として実権を確保もし、政事堂用談役として全業務を掌握した。奇兵隊は存続し、名字使用を許可し、村田蔵六は100石の軍政担当用役に任じ、外交は蔵六の紹介で外国人折衝になっていた栗本佐兵衛を通じて人材を招聘した。軍艦、武器、火薬、建設機械などは高杉晋作の長崎活動を活用した。米、海産物は輸出主力品になった。

村田蔵六（後に大村益次郎と改名）には旋条を銃身内に刻み込むミニエル銃千丁を購入して銃で5個大隊を編成して中隊単位に編成し、高杉晋作とともに指揮、指導により組織化した。

第四章　吉田松陰の歴史的意味

第一節　王政復古

坂本龍馬

幕末の歴史を見る時、19世紀という工業化時代に、このような貧しい小さな島国の中で進展する世界を見渡した上で20世紀のこの島のことを見据えていた人が何人いて活動していたのだろうかということを知りたいと思う。その思いは個人の自由だろうが、その筆頭としてあげたいのは幕府の勝海舟と土佐の坂本龍馬だろう。

勝海舟は1823（文政6）年に江戸に生まれた幕府の家来、坂本龍馬は高知の郷士生まれだっ

た。勝海舟は1863（文久3）年に41歳で日本で最初の軍艦操練所の軍艦奉行となり、坂本龍馬は1862（文久2）年に勝海舟の門下生になって日本が海の国になることを夢見た。2人ともにこの島は世界につながっていることを知って生きていた。

徳川将軍支配の日は1867（慶応3）年6月に坂本龍馬が土佐藩夕顔丸の舟中で後藤象二郎に示した「舟中八策」が大政奉還、新政体で最終決定された。その最終思想は龍馬が師匠の勝に教えられ続けたことだった。

坂本龍馬との会見

江戸で知己になっていた土佐の坂本龍馬が薩摩・長州藩の提携の相談を持って長州の小五郎を訪ねてきた。薩摩藩は第一回長州征伐の急先鋒だったから小五郎にとって最大の不快な相手だったが、龍馬は西郷隆盛の倒幕思想がいよいよ定着して長州との連携を望むことに転じたのだと力説し、熱心に誘い、1866（慶応2）年1月、薩摩藩家老桂久武、西郷隆盛、大久保一蔵(利通)、村田新八と小五郎は京都で初会合し、その後に龍馬と会うことにした。龍馬がこの時に間に立って作成した長薩協約が幕末最後の舞台を開いたのだった[13)]。

幕府の第二回長州征伐

この舞台は日本人の往生際の悪さを初めから終わりまで示した。小五郎は長薩協約直後に陸海軍による長州全土の要塞化に着手した。すなわちミニエル銃8千挺、アームストロング砲15問を持つ藩は100万石の大大名の軍事力に匹敵すると評価された。

大村益次郎と改名した村田蔵六は晋作と奇兵隊を歩いて指揮しつづけたし、晋作はさらに母と妻子とで長崎に家を持ち、「フランス、イギリスとの貿易を始めて武器・弾薬を充実させ、薩摩藩を介して大砲4門を持つ小さなオテント丸という軍艦を購入して僅か9隻だが長州艦隊を作った。

幕府将軍は1866（慶応2）年6月、第二回長州征伐戦争の開戦を命令し、陸軍は芸州口、山陰の石川口、九州の小倉口、関門海峡の1方から侵入攻撃を開始した。この戦争は「四境戦争」とも呼ばれている。薩摩藩は盟約どおり戦争に反対し、フランス、イギリスは利害が対立して参加しなかった。実は老中格の小笠原長行は戦争の中途で逃げ帰ったし、幕府最高の実力者といわれた小栗忠順はフランスのナポレオン皇帝がイギリスを出し抜いて日本に3つの造船所を建設する貸金をあてにしていたことが周知にされていた。

幕府の往生際の悪さには他の例もある。この戦争の最中の7月6日、将軍家茂が病死し孝明天皇も12月に逝去した。これでは戦争継続は不可能にみなったので新将軍の慶喜はやむなく嫌いな勝海舟に全権を与えて宮島で終戦交渉をやらせることにした。ところが慶喜は勝との全

13）加来耕三、勝海舟　行蔵は我にあり、日本実業出版社、1998年、奈良本辰也、四境戦争、小学館、幕末・維新の群像第3巻龍馬と志士たち1989年、佐々木克、戊辰戦争、中公新書、1977年

権委任の約束を反故にしただけでなく、勝に罵詈雑言して、大政奉還に持っていってしまったのだった[14)]。

第二節　王政復古

維新政権の成立

後味悪い第二回長州征伐の後には、政治の舞台は京都で、将軍慶喜は践祚した睦仁親王に大政奉還、将軍辞職を上奏し、御所会議が王政復古を宣伝するという状態になった。攘夷派公家、薩摩藩、長州藩、土佐藩、どっと押し寄せた日和見藩などで鳥羽・伏見の無様な「戊辰戦争」が行われて将軍慶喜は江戸に逃げ帰り、「戊辰戦争」が開幕した。そこから明治新政府軍が編成されて江戸に進軍し、幕府の忠実な核心であった若松会津藩など東北諸藩への攻撃が開始され、1869（明治2）年の北海道函館の陥落で王政の明治維新政権が成立したのだった。これは序章で既に述べた。

第三節　松下村塾と桂小五郎

木戸孝允

42歳の小五郎は木戸準一郎（孝允　たかよし）と改正名して1868（明治2）年につくられた政体書に基づいて従4位下、参与として毛利藩主と同格の政府高官に任じられたが、薩摩藩の大久保一蔵（利通　としみちと改名、参与）と版籍奉還の即時実施を提案して激しく対立した。藩体制は土地所有を基礎としているのだから、藩地を王国の国有に返還する社会体制にすることが急務の戦略であり、この戦略実現こそが藩相互の内乱防止の根幹だと小五郎は主張したのだった。これは高杉晋作が残した「奇兵隊」の庶民思想を継いでいた。

島津久光藩主にはそのような戦略思想は皆無であり、大久保利通は島津藩主の意向に沿って、有力藩主による藩閣内閣制度こそ維新政権の根幹と主張したし、土佐藩の板垣退助は藩士族を5階級に区分して板垣自身を含む家老体制で藩をまず統治しようという主張だった。これらのばらばらな利害の主張が飛び交う中で、小五郎は江戸征東戦争の間に藩長土佐肥前の四藩の版籍奉還上奏を早々に実現してしまった。この思想を共にしていた坂本龍馬は1867（慶応3）年10月、王政復古宣言直前に暗殺されてしまった。

大久保利通との対立

勝海舟、坂本龍馬、大久保一翁とは別にして維新3傑は西郷、木戸、大久保利通と称されるのが日本人の「常識」であるようである。だが政治思想で小五郎と対立した大久保利通は、小五郎を疎外することに苦心したようだった。小五郎は参議として内閣に列したが、大久保の独

14）加来耕三、大久保利通と官僚機構、講談社、1987年、松岡英夫、大久保一翁、中公新書、1979年

裁化の進行を見ながら、小五郎は文部教育に特に関心を持ち、海外教育への勉強に赴くことを夢みた。

木戸は胃癌に侵され、1877（明治10）年からその症状が進行した。西郷隆盛指導の鹿児島士族と新明治政府軍との西南戦争開始の5月26日、44歳で病没した。その時、伊藤俊輔（博文）は36歳、山県小助（有朋）は39歳、品川弥二郎は34歳でいずれも政府官僚になっていたが、伊藤博文が明言しているように、吉田松陰の思想影響はこの人達には残っていなかった[15)]。その他の松下村塾の塾生たちは幕末の騒乱の中でほとんどが死去してしまったのだった。幕末まで松陰から受けた指導思想をその根底まで生かし続けたのは久坂玄端～高杉晋作～桂小五郎（木戸孝允）の流れだったのではないだろうか[16)]。

第六章　私たちへのミッション

青森公立大学の誕生

序章で述べたように、日本の本州の北端である下北半島、旧南部藩の地域は明治新政府によって切り離されて青森県として新接県に編成された。話は政治の都合だから詮索しても無意味だが、青森の地は1万年以上前に北のユーラシア地方から南下してきたオホーツク人がここに縄文の都をつくったことが最近の発掘で広く知られるようになった。「まはろば」という古語は伝説の日本武尊（やまとたけるのみこと）が古事記の中で「大和地方の豊かな盆地の平野」をまほろばと表現したことを、司馬遼太郎が奥羽地方旅行で津軽・南部地方を「北のまほろば」と読んだことで驚かせたのだが、現実の津軽の歴史は全く違う道を辿った。そのことも既に述べた[17)]。

津軽は徳川時代に米作で辛酸を嘗め、明治維新では薩摩・長州の南部諸藩の軍兵からは「白河以北は一山百文」と蔑視されて、明治維新では東京から北海道に渡るための最も適当な場所として青森市が最適ということで、寂しい寒漁村に港がつくられて、その政策の積み重ねで県庁が青森市に置かれて、それから青森県は日本本島の最質県に展開していった。

第2次世界大戦では青森県の陸奥湾に大湊軍港が置かれて、その大戦末期には米軍空襲で青森市は焦土と化し、国立諸学校は西の弘前市に避難移動してしまった。戦後に県庁所在市の青森市に市民の連続する再建熱意の果てに、国立ではなく青森市中心の公立大学としてやっと市民大学が追加新設されたのは1993（平成5）年のことだった。新設の小さな大学の講堂の左入り口に市民たちの建設寄付基金者の氏名が列挙される鋼牌を掲げているのは日本では唯一だろう。

この青森公立大学は東京、大阪などの国立、有名私立大学に子供を送ろうとする家庭の心労を軽減するために県下高校から推薦された卒業生の中で最低1名を必ず公立大学で受け入れる制度で出発した。松下村塾の再現であった。

15）豊田穣、初代総理伊藤博文上下2巻、講談社、1987年、岡義武、山県有朋、岩波新書1958年

16）古川薫、松下村塾、新潮社、1995年

17）司馬遼太郎、北のまほろば街道をゆく41、朝日学芸文庫、朝日新聞社、1997年

この青森公立大学に大学院が追加新設されたのは、それから僅か4年後の1997（平成9）年4月のことだった。学部4年後に連続して2年の大学院修士課程を経させて積年の環境を脱する人材を育てたいという思想は佐々木誠造青森市長、加藤勝康公立大学長の熱い思いから出ていた。

私たちの夢

ここは東京、大阪のような華美で消費富裕の大都会の地ではない。例を求めれば、あの明治維新をすぐそこにまで見ながら江戸、京都を遥に離れて日本海を見た長州藩の萩の奥の村に進んで、1952（安政2）年に吉田松陰たちがたがたぎる思いを燃やして、高杉晋作が奇兵隊のような民衆の組織化を生み出していったような松下村塾が位置する地ではないだろうか。

明治維新は19世紀末にグローバル化を目指して世界に眼を開いた第一回の画機だった。今私たちは新しく21世紀へのグローバル化を目指す第2回の画期を迎えている。この時、高い八甲田山脈の襞の中に沈む学園で青森人が学び、久坂玄瑞～高杉晋作～桂小五郎が排出していく学園がここでありたいとする夢は青森県人が持つ夢ではなかろうか。

青森県は北は北海道に接してロシア、シベリアに通じ、西は朝鮮半島に近い。東は太平洋を隔てて東京よりも短時間の空路でアメリカ大陸に通ずる。青森県は世界でも稀な両域を通ずる世界の大橋になるのだし、現に公立大学学部は創立時からロシアの極東諸大学とは教授．学生の交換活動を開始している。松陰、桂小五郎が夢に描きながら果たせなかった外国勉学の大橋がもう存在している。

第二節　5年たった学部

全国紙での青森公立大学

公立大学の大学院は創立されたが今年でまだ2学年しかない。だからまったく無名だし、学部は5年たったから卒業生がやっと社会に登場し始めたが、日本では田舎のおんぼろ大学としか評価されていない筈だ。

ところが1998（平成10）年7月に日本4大紙朝刊のトップ記事の報道に青森公立大学が始めて登場して話題になった。それは橋本首相が日本のビッグバン宣言の第六項に教育を掲げていて、文部省が大学学長たちを集めて教育審議を始めて、大学改革案を公表したことから起きたことだった。その記事はその内容の紹介で、日本で知られた大学でのんびりしている中で大量の大学生に退学をさせている唯一の例として青森公立大学が紹介されていたことで、学長はテレビで紹介され　それ以後の学長は様々に呼び出されて多忙を極めるようになった。事は単純なことで、先述のように青森公立大学は創設時から圏内大学から他府県に進学しようとする入試での優秀な学生でなく、青森県にとどまる筈の家庭の進学希望者を合格させる制度を置いているのだが、全学の制度で3年時までは特別な学業評価制度を実施しているし、体育をヨーロ

ッパの大学のように廃止して学業専一の授業制度にして、学業不十分な学生には退学勧告する制度を完備させていたのである。この制度はこの国の大学進学者増加に歯止めを掛ける方策としてようやく注目され始めた。だが、こういう考え方は特に父兄には評判が悪く、青森県でも話題にもならずに推移していたのが、これが俄かに文部省に注目されてきたという次第だった。

入学式、卒業式

入学手続きを済ませた学生は父母と共に入学式に出席する。入学生はひとりずつ壇上に上がり、立って迎える学長と「約束したのだから学習せよ」と約束の握手をする。4年を経過すると卒業式が行われる。卒業式は、出ていくとするのではないので学位授与式と呼ばれており、卒業生はアメリカ風の長いガウンと帽子、リボンを着用し、また一人ずつ壇上に上がって迎える学長に「約束した通り勉強し、これから社会に出ていきます」とあいさつの握手をする。握手が固いので学長の手が腫れ上がる日である。そこで全卒業生が選んだ学生が答辞を話す。「卒業するのには大変でした。でもがんばりました。人生の辛い経験でした」と女子学生が泣きだし、父母の中でもハンカチが動く。

それから音楽とともに壇に立つ学長の背後のガラスの長く大きな窓が横にゆっくりと開かれて、市の山、丘、光景が山の上から遠くまで見通せるようになる。社会が学位授与者の学生を迎えるフィナーレで授与式が終了する。

1997年創設の大学院は入学式は既に経験したが授与式はまだないので紹介することはできない。だが入学式に出席した顧問団の方々から2年の修士課程だけではなく5年制の博士課程をすぐに造れという勧告がされたことを紹介したい。この日はまた創建の大学院棟の公開の日でもあった。大学院制は成人が対象だから「さん」と呼ばれる。松陰が子供を呼んだことの再現である。院生は8人1室の勉強机を持っているが、3階には12畳の和室が集会のために設けられていて松下村塾のつもりである。院生は在居か下宿をしているが、この和室で自炊する院生も品川弥二郎のように出て来ているし、この和室に泊まる院生もいる。その方が徹夜勉強に便利だという。教室はビデオ完備だし、コンピュータ教育のワークショップの不自由は無い。教授、職員の室も隣接しており、出入り自由だし共同研究室も公開されていて松下村塾に似ている。

第3節　5年たった学部

学生の姿

大学院はまだ2年目だから、まだ一般に授業は公開していないので、これも参観希望が増えている学部の状態を紹介したい。東京の大学の先生、文部省の官僚たちの1998年の参観者の記録である。

昼の時刻になったので、ある教授が大学食堂に入った。短い食事時間なのでソバですませる

つもりで食券を機械で買って配膳の前に並んだ。すぐ前に茶髪、ピアスの男子学生が並んでいたがふっといなくなった。その先生は「東京の大学じゃあ先生が並んでいたって知らんふりの他人だよ」という。ところが列が少し動くとその学生が帰ってきてその先生に「どうぞ」とトレイを指し出した。その教授がトレイを持って並んでいたので、あっという間に取りに行ってくれたのだった。「こんなことしてくれる学生なんて東京にはいないよな」と教授は言った。

東京の女子学生は今では服装、バッグ、化粧もブランドだらけだから、授業見学で女子学生のブランド学生が何割かを調べるのに熱中した女性教授かいた。授業参観後に教授が怒ったのは1人もブランド学生がいないことだった。「青森の学生は貧しいんだな。街に出掛けてよく見ることにしよう。これじゃ女子学生がいたなんて言えないからね」。

授業で学生が出入りしたりしないのに驚いた教授がいた。「東京じゃ授業中でも学生の出入りは自由だよ。教授も注意しないよ。無関心に講義して出ていってしまうよ。ここは学生が出ていかないのに驚いた。変わった大学なんだね」。朝の早い時間の授業を参観した東京の教授がいた。午前10時なのに200名程の学生がいた。先生が文章を配った。「ある人が明日は人間ドックだというので絶食宿泊になった。会社へのレポートを書くつもりで病院に着いた。ところがコンセントを忘れたので急いで近所の電器店を回り、事情を話して、指さしながら、これと同じワープロのあのコンセントを売ってくれと店員に頼んだ。ところがどの店の店員も、部品はお取り寄せになりますとその販売を断られた。あなたならどうするか？」

30分の小テストの回答を授業後に読んだその教授はうなった。「東京のアルバイト学生とは違うな。9割以上の学生はこう答えている。お客さんの欲しいもの、欲しいことに役立つことがアルバイトだと思うのが私の心だ。それが会社のマニュアルを超えた私の仕事だと思う」。

第4節　大学院はやっと2年目

大学院生の1年は春学期が終わったばかりだからまだ報告するまでには至らない。だが東京とは違うのはキャンパスが山の中だから、院生の出席がよく、机に向かうと外に出てくることは珍しい。大学院の授業は学部とは打って変わって学習条件が厳しい。学科は経営経済学1科で構成は大きく必修科目、選択科目34科目と論文に分かれていて、成績評価はA、B、C、Fの4ランクで、その評価基準はアメリカの基準と協議の上で設定していて日本のように楽にしておらず、成績評価は学期ごとに公表している。Fは落第で必修はFでは再履修しないと合格にならず、C、Dだと総数の枠が制限されていて制限を超えると認定が打ち切られる。アメリカの大学院では修士制度の再検討が行われているので、オレゴン州の大学院の状況に応ずるように調整されている。

学年は2年制で学期は春学期、夏学期、秋学期で1年が分割しており、春学期は主として専任教員、夏学期はアメリカ在籍教授、日本在籍教授、台湾在籍教授などの出席教授の出張授業で家族をあげての自炊滞在に応ずるための国際宿泊施設が創立時から完備しており、家族の便利、語学学習のために院生がサービスにつくことを推進している。秋学期は大学専任教員、日

本在籍教授の非常勤講師が主である。また2年については大学専任教員の必修科目の論文課題指導が1年を通じて必修科目としておこなわれる。

必修科目は経営学原理（4単位、在籍2教授）、マクロ経済学（8単位、在籍日本、アメリカ教授、この中で2単位はコンピュータ経済学、ワークショップ使用）、統計経済学（4単位、日本教授）であって、1年春学期に集中している。

2年目にはマクロ経済学、統計経済学の1年時不合格再履修のほかは選択科目および課題研究として修士資格獲得のために修士論文、研究報告作成のどれかを選択して文書を提出するための学習研究が必修科目として設定されている。課題研究の授業時間は無制限である。

英語はすべてアメリカ大学院博士課程進学を目標とする水準に設定してあり、動かしてはいない。

青森公立大学は1993（平成5）年の学部創設にあたってオレゴン州の私立名門ウィラメット大学と提携契約を結んだのだが、1997（平成9）年の修士課程大学院創立にあたっては、21世紀の経営学、経済学の発展を見すえた上で協働教育協約に進んで、ウィラメット大学を中心としてオレゴン州諸大学から教授の半数の出張滞在教育を仰ぐという日米單位制に構成することに変革した。

その公立大学院生に2年生が生まれた1998年10月、突然に事件が起きた。州立オレゴン大学、オレゴン州立大学各1名の滞在授業中にその2年生3名を別々に選んで自身の大学院に学習見学に招くというのである。公立大学では学部創立4年でアメリカの大学院に卒業後に進学した実績は全く無かった。

この事件発生の予告は皆無だった。申し出を知った学長は驚いて突発予算を起こし、事務職員1名の引率下でその3名の指定院生の年末終業直前のオレゴン州訪米を可能にした。思いがけないこの事件は、思いをつくし魂をつくす私たちに21世紀の松下村塾からのミッションを伝えたように思える。

5年前の学部創設にあたって佐々木市長、加藤学長ともに大学院創設をも合意決定していたのだが、その博士課程への拡大は少なくともミッション10年の定着後を期するという慎重を堅持していた[18]。第1回の修士課程修了生は1999（平成）11年3月から生まれる。

（青森公立大学院研究科長）

（1998年9月20日受理）

18）『編集ドキュメント公立大学を創る』　青森県商工水産部　池辺俊　企画調査課長　平成5年4月、加藤勝康「大学冬の時代　青森から大学の革新を目ざす」などの文書は大学院生全員に配布されている。